

0歳からのきこえの発達質問紙

日本語版 EASD : Early Auditory Skill Development for Special Populations

子どもの氏名 _____ (記入日 _____ 記入者 _____)
生年月日 _____ (年齢= 歳 ヲ月), 補聴 (なし, あり: 補聴開始年齢= 歳 ヲ月)

すでにできる項目は○、できつつある項目は△、まだできない項目は×で印をつけてください。

発達段階 1. 音に気づく、音へ注意を向けはじめる；音と周囲の出来事を関連づけはじめる

- [] 大きな音に対するはっきりとした反応 (驚く, 動きをとめる, 声を出す, 目を大きく見開く, まばたきをする) がある。
- [] ふとした物音や、やや小さめの音に対してもはっきりとした反応 (前項を参照) がある。
- [] 養育者の声に対するはっきりとした反応がある。
- [] 音を出す物を注視することがある、養育者と目が合うことがある。

留意点: 検査音を何度も呈示し続けた場合や、その場所に元々同じような音がある場合には、子どもがその音に慣れてしまい反応しない場合があります。また子どもが触れることを嫌がらないようなら、音に気づいたときにはどんな反応であっても、その物にさわったりスキンシップをとったりしながら一緒に楽しみましょう。

発達段階 2. 音源をみつけようとする；音の意味を理解しはじめる；意図的に声を出しはじめる

- [] 音を出す動く物や養育者を追視しようとする。
- [] 音のする方向へ振り向いたり、手を伸ばしたりする。
- [] 養育者の声かけに笑う。
- [] お着替え・だっこ・おむつ替えのときや、手足・体を動かすあそびの間に声出しが増す。
- [] 語りかける声の調子 (あやす, 大きな声を出す, 普通に話すなど) を大きく変えると、表情や動きが変わる。
- [] 声出しあそびをする (養育者の声かけによって声出しが増す)。
- [] 気に入った物をみたときなど、その物に対して声を出す。
- [] 歌や音楽が流れると声を出したり、ふと聞き入ったりする。

留意点: この発達段階では、物事の因果関係 (これはこうなる, こうするとこうなる) について少しずつ理解がはじまっています。子どもの反応には、できるだけすぐに応じてあげましょう。

発達段階 3. 音源をみつける、音源を追う；音の意味を理解する；意図的に声を出す

- [] 音の出る物を意図的にさわったり、いじったり叩いたりする。
- [] ある一定の短い時間、声に聞き入る。
- [] もっとあそんでほしい、楽しいことを続けてほしいときに、養育者に声を発する。
- [] 周囲の音の状況に変化があると、何が起きたのか気にする。
- [] 機嫌の良いときと悪いときで、出す声 (泣き声ではなく) の調子が異なる。
- [] お腹がすいた、もっと食べたい、だっこしてほしい、それがほしい、誰かにかまってほしい (部屋に一人にしないでほしい) ときなどに、養育者を声 (泣き声ではなく) でよぶ。
- [] 不意の見知らぬ音に驚いたり、不安になって泣いたりする。
- [] 音あそび (拍手パチパチ, 手をふる, おもちゃをたたく, 簡単な声あそびなど) を繰り返して楽しむ。
- [] 料理する音・水の出る音・声・動物の鳴き声・教室でいつも聞く歌・ドアの閉まる音・車の鍵の音といった音の手がかりから、これから起きる日常の事柄・身近な人の動きなどを

予測することがある。

- [] 身振りを交えた日常よく使うことば（バイバイ、だっこしましょうね、いただきます、バンザイ、手あそび・指あそびの歌など）を理解できることがある。

留意点：この発達段階では、子どもが補聴を受けている／受けていないに関わらず、聴覚機能はとても重要です。同時に、認知・運動・視機能の発達も重要です。音源の詮索（振り向き）のためには、頭部を上手に動かせることが必要です。運動機能に障害や遅れがある子どもの場合は、この機能の発達のためにしっかりした支援と配慮が必要です。視覚に重い障害がある場合には、多感覚的な刺激によって関わる必要があります。このような子どもたちには、互いにやりとりできるジェスチャーの使用も工夫しましょう。聞こえの状況について把握することは、子どもに語りかける際の適切な声の大きさ・適切な距離を知る上で大切です。子どもの音への詮索の様子をみる前に、音が耳にきちんと届いているかどうか、必ず確認するようにしましょう。

発達段階4. 音／ことばの理解が増す；声をコミュニケーションのために使う

- [] バイバイ・どうも・おしまい・ダメなどの、日常よく使うことばを理解する。
- [] 自分の名前を呼ばれると、振り返る、笑う、手を挙げる、声を出す。他の人の名前の場合には、そのように応じない。
- [] 声まねあそびをする（違う声のパターンを聞かせると、声の出し方を変えようとする）。
- [] バイバイ・おはようなど、日常よく使うことばをそれらしく言う。
- [] 何か言うとき、要求するとき、困ったとき、怒ったときなどでいろいろな声の出し方（声の高さ、大きさ、長さ）をする。
- [] 養育者や身近な人の名前らしきもの（あるいは物の名前）を言う（パパ、ママ、ナナなど）。
- [] 複雑な音の出るおもちゃ（ボタンを押したり、握ると音が出る物）を楽しんで使う。
- [] 嫌なときや「イイエ」を示すときに、首を横にふる。
- [] ある程度の長さの時間、話し手と関わり合えることができる。
- [] 音楽に合わせて体をゆする、踊る、ダンスをする。

留意点：この発達段階では、子どもの運動機能は巧みさを増しながらもまだ粗雑さが残っており、このことは様々な面に影響しながら表れます。運動機能に障害がある場合には、「音楽に合わせてダンスをする人形」のボタンを押してあげるなど、関わり手である大人が代わりに応じる必要があります。このような障害がある場合、聴能の評価や指導の際に、子どもに手でスイッチを操作させるような工夫が有効なこともあります。発声・発語に関わる運動障害があると、ことばの模倣に困難が増すため、この発達段階において代替コミュニケーションのやり方について検討されなければならない場合があります。なおこの発達段階を通じて、交互のやりとり（turn-taking）による関わり方が習得されます。

発達段階5. 聴覚的な言語理解がはじまる；話しことばを使う；会話によるやりとりがはじまる

- [] 身振りなしで、ことばによる簡単な指示を理解できる。
- [] 身の回りのいろいろな物の名前やよく使う表現など、話せることばの数が増え続けている。
- [] ところどころに指さしや身振りなどを交えながら、文らしきことばを話す。
- [] 言われたことが分からなかったとき、そのことを話し手に伝えたり、知らない物について、「ナアニ？」と聞いたりする（質問行動の始まり）。
- [] 目の前にない物について、その物の名前を挙げて話す。
- [] 家族の名前・クラスの友達の名前・体のいくつかの部位の名前が分かる。
- [] 周囲に他の音があったり、何かに気をとられているときでも、先生や友達がよぶ声・合図などが分かる。

留意点：この発達段階では、子どもの発達に認知と発声・発語運動の発達が大きく関わります。この発達段階を過ぎると、言語理解面の発達検査を適切に用いることによって、聴覚的理解の発達の様子を詳しく知ることができるようになります。